

245 陳旧性心筋梗塞における ^{99m}Tc -PYP スキャンの臨床的意義

松下重人, 杉岡五郎, 多田 明*, 立野育郎*
(国立金沢病院 内科, 放射線科*)

発症後4週以上経過した陳旧性心筋梗塞症(OMI)において, ^{99m}Tc -PYPスキャンを行い, その臨床的意義について, 心プールスキャンによる左室駆出率(LVEF)冠動脈造影所見と対比検討した。

OMI22例, 男18例, 女4例, 35才から78才, 平均63才を対象とし, ^{99m}Tc -PYPスキャン像は, Parkeyの方法で評価した。全例に, 心プールスキャンでLVEFを求め, 15例に冠動脈造影(CAG)を行った。

^{99m}Tc -PYPスキャンの結果は, grade 0: 8例, grade I: 2例, grade II: 6例, grade III: 6例であり, grade II以上のfocalな集積は5例にみられた。Diffuse, focalにかかわらず grade II以上の集積を異常として, grade I以下の10例(I群)とgrade II以上の12例(II群)に分類した。I群のLVEFは $54 \pm 15\%$ (平均 $\pm$ SD)であり, II群のそれは $41 \pm 11\%$ とII群で有意に($p < 0.05$)低下していた。CAGを行ったI群8例の所見は, 3枝病変1例, 0ないし1枝病変7例であり, II群7例は全例多枝病変であった。

OMIにおける ^{99m}Tc -PYPスキャンの異常集積は左心機能の低下, 多枝冠動脈疾患の存在を示唆する。

246 小児心筋炎患者における核医学的手法による長期予後評価

若倉 学, 武藤敏徳, 奥住一雄, 河村康明,
山崎純一, 森下 健(東邦大一内), 佐地 勉,
松尾準雄(同小児), 佐々木康人(同放)

臨床所見、各種検査法によって確定しえた小児心筋炎患者(発症平均年齢6.9才)16例にタリウム心筋シンチグラムおよびテクネシウム心シンチグラムを発症時、発症後(3ヶ月~3年)に反復検査し心筋摂取率・心機能の評価を行い、長期予後の判定を行った。タリウム心筋摂取では16例中11例(68.9%)においてタリウム摂取低下を認め、炎症所見の改善後正常化傾向を示した。

テクネシウム人血清アルブミンによる左心室駆出率(LVEF)は56.4%より56.8%とほぼ変化を認めなかった。

低年齢心疾患に対する心筋viabilityの状況、心機能の評価を本法にて施行し、他の心機能検査法を加味し、興味ある知見を得た。

247 $\text{Tc}-^{99m}\text{-PYP}$ 心筋シンチグラフィーによる心アミロイドーシスの診断

本郷 実, 山田博美, 大久保信一, 平山二郎,
藤井忠重, 草間昌三(信州大一内)

原発性アミロイドーシス4例, 家族性アミロイドポリニューロパチー(FAP)6例, 各種心疾患および健常例31例に $\text{Tc}-^{99m}\text{-PYP}$ シンチグラフィーを施行し, 本法による心アミロイドーシスの診断的価値について検討した。アミロイドーシス症例全例で $\text{Tc}-^{99m}\text{-PYP}$ のびまん性心筋集積(高度2例, 中等度6例, 軽度2例)が認められ, 3例では心筋のほか肝に, 1例では甲状腺にもびまん性集積がみられた。心筋集積度は, 心エコー図上心室壁の肥厚あるいは心筋エコー輝度の増強のみられた例でやや強く, 原発性アミロイドーシスとFAPとの対比では, 後者でやや弱い傾向がみられた。一方, 他の31例中では7例で軽度ないし中等度のびまん性心筋集積がみられたが, 高度の集積および肝, 甲状腺への集積は認められなかった。近年, 心アミロイドーシスの診断上, $\text{Tc}-^{99m}\text{-PYP}$ シンチグラフィーの有用性が報告されているが, 本法は原発性アミロイドーシスのみならず, FAPの心病変の検出にも有用と思われる。しかし, $\text{Tc}-^{99m}\text{-PYP}$ のびまん性心筋集積は他疾患でもみられるため, 肝, 甲状腺集積の有無にも留意すべきであり, 本法のみによる心アミロイドーシスの診断には慎重な判断が必要である。